Essay In My Life

「引きこもり」と「庵／隠居」

～「世を捨てる」空間の不在～

シンキング・バーズ
日本語研究班

世の中が嫌になった時の暮らす場所の求め方

悪いイメージを伴う「引きこもり」という日本語が、世の中に広く普及するようになったのは、恐らく 21 世紀に入ってからです。「引きこもり」の原因は、その人に応じてさまざまと言われています。学校や職場でのハラスメント、地域社会との繋がりの欠如、抱えている病気への悩み、あるいは、個人的な趣味やこだわりに没頭する「オタク」という可能性もあります。いずれにしても「引きこもり」は、予期せぬ犯罪に至ったケースもあり、社会的な注意が向けられる日本語になっています。

●「世の中」「世間」「巷」「俗世」

ボクたちは、「社会」という日本語にはさまざまな課題があると考えています。その考察は別項で書きましたが、ここでは、「社会」に代わる日本語として「世の中」を使います。

「世の中」は、さまざまな人が集まって形成されています。「世間」「巷」「俗世」などのことばもあり、有象無象（善人も悪人もいる）の成り立ちをしています。人々の集まりですから、いろいろなことが起こり、個人的な体験の多くは、人との関わりを通じて経験します。楽しい体験がある一方で、辛く苦しい体験もあります。一つの出来事を共有して体験しても、ある人には楽しい、ある人には苦しい体験になるかもしれません。そのさまざまな出来事を体験する空間が「世の中」です。

人にとって「世の中」が、良いことばかりではないことは、誰でも知っています。お互の心を傷つけ合うこともあり、落ち込んだりします。深く傷つくと、自分を責めると同時に、「人が怖くなる」「世の中が怖くなる」「世の中が嫌になる」という心理回路が回り始めたりします。「世を憂う」「世を儚む」ということばもあり、難しく言うと「厭世（えんせい）主義」と呼ばれます。「世の中」を悲観的に考える傾向が強くなることを指します。いわゆるネガティブ思考です。ネガティブ思考自体は、必ずしも悪いことではありませんが、「引きこもり」の心理状態の一つです。

「引きこもり」が悪いイメージを伴うのは、「人は社会的関係を持って当然（世の中を嫌ってはいけない）」とする考え方が、強く影響しています。人同士の関係が、上手く行くに越したことはありませんが、人には、その人固有の世界があります。その世界を大切にしたいという心理は、こだわりの強弱があるにせよ、誰でも持っています。人は、その固有の世界を、他人から嘲笑われたり、強く否定されたり、あるいは、無視されたりする経験を重ねると、人への不信感を募らせ、「社会的関係」を断つ可能性を高めます。その結果としての「引きこもり」は、登校拒否を含

めて増える傾向にあると考えられています。

ここには、「社会的関係を持つ＝正常」「社会的関係を断つ＝異常」の通念があり、人との繋がりを断った「引きこもり＝一人でいるのが好き」は、当人に「異常」のレッテルが貼られることになります。繰り返しになりますが、「社会＝世の中」とは、有象無象の人々の集まりで、善悪混同の空間なのです。

●引きこもり空間としての「庵」

歴史的に見て、世の中が嫌になった人々がとった処世術に、「世を捨てる」という方法がありました。現代のように自ら命を断つのではなく、出家して仏門に入るなどの方法で「世を捨て」ました。ヨーロッパ史的には、修道院に入るなどの方法でしょう。「世俗」の争いや揉めごとに嫌気がさし、神仏の加護に頼って心穏やかに暮らす方法でした。出家した人の空間に世俗の人々は、基本的には手出しができませんでした。

それとは別に、世俗のまま「世を捨てる」方法として、「庵」に引きこもり、思索に明け暮れる生活を営んだ人々がいました。「庵」とは、まさに「引きこもり空間」のことでした。鴨長明や吉田兼好などの著名人が、執筆に励んだ空間としても知られています。「オタク」と呼ばれる人々の「引きこもり空間」も、その意味では「庵」と言えます。

ボクたちは、「庵」には「庵」の価値があると考えています。鴨長明と吉田兼好の例で言えば、鴨長明はネガティブ思考のままの著述で世を憂いましたが、吉田兼好はポジティブ変換を試みてお笑いネタにしました。どちらが良いかの判断はともかく、それが彼ら固有の世界観した。その「引きこもり」を否定し、「庵」で訳のわからないことを書いている変人としてしまっては、身も蓋もないことになります。彼らは確かに、ある意味かなり変わった人だったかもしれませんが、「世捨人」として、後世に名を残す働きをしたことは確かなのです。

現代社会では、その「世捨人」が生きて行ける「庵」が欠落していると言えます。

●「御隠居様」で何が悪い！

世俗のまま「世を捨てる」もうひとつの方法は、「隠居」でした。通常は、武士や商人の高齢層が、息子などの跡取りに家督を譲り、現役を退くことを指して「隠居」と呼びます。

「隠居」は、現役世代に活躍の場を譲る世代交代の手法として、長く機能していました。「隠居」した高齢者は、その家の経済事情によるとはいえ、世事を離れて「自適」の生活を送るとされて来ました。「自適」とは、自分に合った生活、衰えて行く体力や判断力に応じて、「無理をしない／させない」生活を送ることと言えます。

ところが、現代社会では、「隠居」ということば自体が死語化し、「生涯現役」だの「老老介護」だの「高齢者への虐待」だのが、まかり通る世の中です。なぜ「隠居」は廃れたのか？　人の寿命が伸びて、年金だけで暮らせない人が増えたからか。核家族化が進み、高齢者の独居割合が高まったからか。考えてみる価値はあるかもしれません。

現代社会では、「世を捨てる」という観念自体が希薄です。人は、世の中（世間）から捨てられないように、孤立しないように生きて行くもの。「世の中を捨てる」って、あなた、正気？　「世捨人」の社会的地位なんてないのが当たり前なのか、「○●庵」や「御隠居」を堂々と名乗れる風習は廃れました。

「引きこもり」の一人とも言えるボクは、堂々と「世を捨てて、庵にこもったり、隠居したって良いじゃないか！」と言いたいです。

（令和元年７月３日）

シンキング・バーズ新書

「引きこもり」と「庵／隠居」
―「世を捨てる」空間の不在―

2019 年 7 月 3 日（初版）発行

著　者 ： シンキング・バーズ
日本語研究班
発行者 ： 遊佐　芳泰
発行所：**シンキング・バーズ**
〒021－0821
岩手県一関市三関字神田１０５番５号
電話／ＦＡＸ　0191－23－0724
※この論考の著作権は、図表を含めてシンキング・バーズに帰属しています。複写、無断転載、無断転用は固くお断りします。